



名古屋市立大学でのこの一年 高大連携派遣報告



名古屋市教育委員会連携推進教授 花岡 道子

4月に名東高校から派遣されて一年間この名市大で過ごしてきた。今回紙幅をいただいたので、一年間の活動を報告する。何かのご参考になれば幸いである。

1 授業

前期は主に1年生用科目「大学生になる」で学生の提出物にコメントをつけたり、記述時のポイントを解説したりしていた。担当されていた多くの先生方と事前や事後に打ち合わせを行うことで知り合えたことは心強かった。加えて、人文社会学部で何コマか講義を担当させていただいた。初めての大学での講義ということで肩に力が入りすぎてしまい、準備にかなり時間をかけることになったが、同時に準備に時間がかげられる幸せを感じた経験だった。



後期には教養教育科目の「社会学C」と「地域連携参加型学習」を担当した。「社会学C」はESD・SDGs入門として、世界や日本の課題をワークショップも交えて学ぶ入門科目として設定した。内容が簡単すぎるかと心配だったが、高校までの社会科が苦手だったのか、学生は毎回新鮮な発見を書いてくれた。オンラインで高校の教室と大学の教室をつないで実際に交流しあう授業も1コマだけが行った。この時には受講生が少なかったため、名市大に来ている留学生にも参加してもらった。

* 高校生との交流の詳細は「高大連携授業の可能性」として人間文化研究所年報に掲載予定

「地域連携参加型学習」では「名古屋の高校教育」とテーマを設定した。学生を連れて名東高校に現地調査に行き、高校生との交流会も行った。

その後学生の興味関心に基づいて高校教育を改善するための提言をまとめ、名古屋市教育委員会事務局の前でプレゼンを行う形で実施した。付き合っていた事務局からも好評であった。うち1グループには高校生の前でも発表してもらう予定である。

教師を長年経験してきて最も感動するのは、こちらの想定外の力を受け手側が発揮するときである。そのためには、問いの内容とともに場の設定が重要だと考えている。高校生の交流の場では大学生は思わぬ力を発揮すると実感した。加えて高校生も大学生もとても生き生きとした表情をしていた。可能であれば今後も継続したいと考えている。

2 その他の活動

夏には「大学丸ごと研究室体験」や「グレイド・スキップ・チャレンジ」のいくつかの講座に参加した。これまでは一日あけて講座に参加すること自体が難しかったが、今回は駆け足ではあったが、キャンパスの訪問も兼ねて様々な講座に参加させていただいた。高校の教室では学ぶことのできないテーマについてじっくりと取り組むことができ、とても有意義な講座であると痛感した。しかし、多忙な高校生の日常から考えると、特に複数日開催の講座の場合、参加のハードルが高いと思うので、大変もったいないことだと思う。また、秋には、医学部環境労働衛生学の出前講座を名東高校で行う橋渡しなども行った。このような希望があればいつでも声をかけていただきたいと思う。

更に教職課程の学生の教育実習前指導や面接前指導、最終発表会に参加し、コメントを行った。ブラックな職場であると喧伝されて久しく、教員のなり手不足は深刻な問題である。創意工夫を凝らしつつ報告をする学生の姿をみて、ぜひ前向きな名市大の学生と教育現場でともに働きたいと思った。

3 一年間大学について

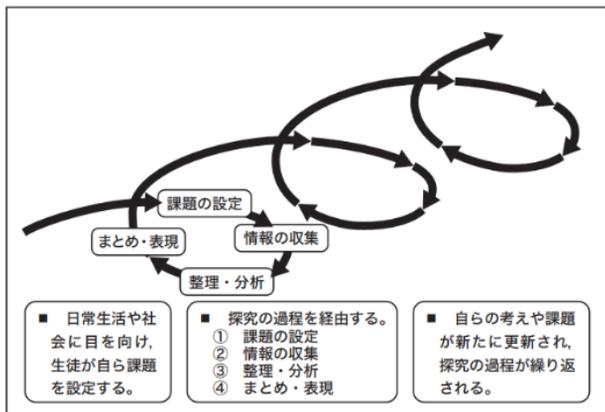
自分の学生時代と比較すると、大学での学びの姿が様変わりしていることに驚いた。大学でアクティブ・ラーニングが取り入れられていることは知識として知っていたが、様々な形式のアクティブ・ラーニングが行われていた。小中高でも同様の傾向があるので、学びの質はかなり大きく変化していることを実感した。

高校では今年度から新学習指導要領が実施されている。これまでは「何を学ぶか」に主眼が置かれてきたが、今回の改定では「何を学ぶか」だけでなく、

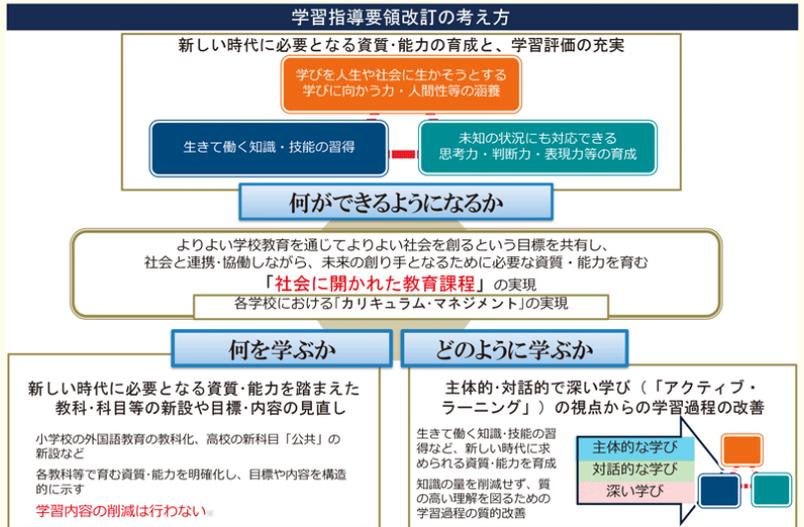
「何ができるようになるか」「どのように学ぶか」も含めた形に変化した。総合的な探究の時間だけでなく、他の教科・科目でも探究活動が大幅に取り入れられ、高校の学びの変容が求められている。しかしながら、学習内容の削減はされないため、特に大多数が大学入試を目指す高校では入試対策としての知識量と深い学びが同時に求められていることによる困難さを抱えている。

総合的な探究の時間では、各学校が創意工夫に基づいて学習内容を構想することになる。このことは、教科書や大学入試によって平準化されてきた高校段階の学びが、学校によって、さらには教師によって多様化されることにつながる。大学にもより多様な学習経験をもった学生が入学してくることになると思われる。

探究における生徒の学習の姿



第2-14図 学習指導要領改訂の方向性



(出典) 文部科学省資料

GIGAスクール構想による一人一台端末も始まり、生徒はICTを用いた情報収集に偏りがちである。単なる情報ではなく、全体を俯瞰できるような知識の集積をどのように行うのか、さらには活動主義・形式主義に陥らずに深い学びをどのように実現するかは、かなり重い課題である。様々な面から高校と大学の連携が今後一層求められることになると予想される。

おわりに

一年間大変貴重な経験をさせていただいた。当初は高校とのあまりの違いに戸惑うことばかりだったが、光陰矢の如しとはよく言ったもので、あっという間に一年が過ぎつつあるというのが正直な感想である。高大連携の二年目ということで、今後にもつながる形式をつくりあげることが念頭にあったが、私自身の力量不足で十分な働きはできなかつたと反省する。一年間いろいろな場面で助けていただいた先生方に感謝するとともに、今年度限りではなく、末永く連携を継続していただけると大変嬉しく思う。

